様式第２号

会　　議　　録

<table>
<tr><td colspan="2">会議の名称</td><td colspan="3">平成２８年度　第２回豊中市図書館協議会</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td colspan="3">平成２８年（２０１６年）１０月２５日（火）１８時００分～２０時００分</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td>豊中市立岡町図書館　集会室</td><td>公開の可否</td><td>㊀・不可・一部不可</td></tr>
<tr><td colspan="2">事務局</td><td>読書振興課　岡町図書館</td><td>傍聴者数</td><td>６人</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開しなかった理由</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委員</td><td colspan="3">荻原 まゆみ　天瀬 惠子　松田 美和子　岸本 岳文　渥美 公秀
瀬戸口　誠　樋口 名子</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="3">北風岡町図書館長　須藤庄内図書館長　虎杖千里図書館長
松井野畑図書館長　島津岡町図書館副主幹　山根岡町図書館副館長
永島岡町図書館副館長　河本岡町図書館主査</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="2">議題</td><td colspan="3">１　（仮称）南部コラボセンターにおける図書館機能について
２　その他</td></tr>
<tr><td colspan="2">審議等の概要
（主な発言要旨）</td><td colspan="3">別紙のとおり</td></tr>
</table>

平成２８年度（２０１６年度）第２回図書館協議会

日時：平成２８年（２０１６年）１０月２５日（火）１８時～２０時
場所：豊中市立岡町図書館　３階集会室
出席者：（敬称略）
　委　員　　荻原　天瀬　松田　岸本（委員長）　渥美　瀬戸口　樋口
　事務局　　北風　須藤　虎杖　松井　島津　山根　永島　河本

開 会
資料確認

●委員長
　それではお手元の次第に沿って議事を進めさせていただくが、ここで図書館協議会の運営方法について、委員の皆様にご了承いただきたい。図書館協議会の運営方法として、豊中市では原則として審議会を公開しており、傍聴については１０人を定員にしているが、定員を超えた場合の傍聴者の人数については、その時の状況を見ながら私の方で判断させていただくということでよろしいか。なお傍聴の方にはアンケートをお願いしており、協議会を傍聴されてのご意見等をお伺いし、特に委員の皆様にもお伝えすべき内容については、報告させていただく。
　次に前回会議録については事前に送付されたものに委員の方々のご意見はなかったので、公開の際にはお手元の記録と同じように、概要として発言者については個人名を掲載せず、「委員」とのみ表記することを了承いただきたい。
　それでは、議事に入る。議題１は、前回に引き続いて（仮称）南部コラボセンターにおける図書館機能についてですが、事務局から前回の会議内容を整理した上で説明をお願いする。

●事務局
　前回いただいた意見を、資料１の論点整理として一枚にまとめているので、それに沿って説明する。
　まず（仮称）南部コラボセンターにおいて交流拠点機能として位置づけられている図書館について、図書館は生活・学習等支援拠点機能として捉える必要があると複数の委員からご指摘をいただいた。
　また、交流拠点機能については、情報源となる他機関・他施設につなげていくというレフェラルサービスを、もともと図書館が行っておりそれを十分活用すべきであり、交流拠点機能のみを強調すると学習支援機能が疎かになりはし

ないかという意見もあった。
　図書館の機能については、基本的な役割はつないでいくことにある。そういう機能を中心に据えてキャリアセンターなり市民活動などが出来るようになれば、（仮称）南部コラボセンター全体が有機的に機能するのではないかという意見や既に持っている図書館サービスの中で図書館機能を整理することで、図書館が持つ資源を最大限活用し、レファレンス機能を発展させて課題解決支援機能を地域で展開すべきではないかという意見がでた。
　また、様々な地域の情報を収集整理し地域の人々にフィードバックするとともに、資料や情報を必要な人への提供と地域のその分野のスペシャリストにつないでいくというサービスも図書館の持つ基本的サービスであるので大事にすべきだという意見。
　学校連携の視点については、たとえば図書の時間に学校から図書館に来館し公共の場で授業に関する事を調べることで、将来の図書館利用者が育つ可能性と公共のマナーも学べる利点があるとういう意見。
　「居場所」ということに関しても単なる物理的場所ではなく、図書館は子どもの発達段階に応じて本が見つけられるという「図書館の働き」がある上での「居場所」ということを留意する必要があるという意見。
　世代間交流については、幅広い年齢層が集まる図書館の中で、生徒・学生・成人など様々の人びととの交流の中で生活と学習との関連性の理解につながるのではないか。これは、特に高校生や大学生の学習が身近な生活とつながっているという意識を普段持ちにくいという観点からの意見である。
　間口の広い図書館ではあるが、本当に責任を持って出来る事にしぼって提言の形にまとめていく必要があるのではという意見などもあった。
　他に（仮称）南部コラボセンター全体に関わっては、担い手あるいは利用者で積極的に施設に関われない人々が多くいる地域には、地域での生活上必要な根本的な施設としての有様が求められるのではないかという意見。
　高齢者の人口比率が非常に高いという地域特性を踏まえた上で地域活性化を図っていくべきという意見。千里コラボとの比較を徹底して行い南部地域の現状に沿った計画を進めていく必要があり、その際に重要なことの一つは南部地域に勤務する教員の意見を聞きながら（仮称）南部コラボセンターを進捗させていくべきだという意見。地域の施設として、災害時の拠点という視点も非常に大事であるという意見。など多くの意見をいただいた。

●委員長
　議論を始める前に前提となる事を確認したい。新しい図書館として付加される機能を議論する前に、その前提となる図書館本来の機能を、現状の南部地域

の図書館の実情を踏まえた上でそれを発展させていくべきだと考えるが、この方向で進めていいのか。

●事務局
　委員長ご発言の通り、現在の庄内図書館の機能たとえば蔵書構成なども含めて、基本的に引き継ぎながら、新しい（仮称）南部コラボセンターの有様を考えていきたい。

●委員長
　図書館本来の機能を充実させながら付加される機能を、どう絡めていくのか、いけるのかを考える事が大事だ。
　前回のまとめを含めて、ご意見などあれば発言ください。

●委員
　論点整理の資料や配布された統計データを見ると、庄内図書館は貸出利用者の世代構成が千里コラボとは違うイメージを持ったが、南部地域の特性をどう捉えていくかによって（仮称）南部コラボセンターの進め方は変わってくる。たとえば、高齢者の人口比率の高さなどから、高齢者サービスの充実が図書館にも求められてくるだろう。こういう難しい問題を踏まえて（仮称）南部コラボセンターをどう位置づけていくのか考える必要がある。

●委員長
　前回は学校や子どもたちの話が中心だったが、高齢化率の高さや高齢者の利用が多いことも踏まえて置く必要があるということですね。

●委員
　前回配布資料の（仮称）南部コラボセンター基本構想の概要版を見ると、（仮称）南部コラボセンターはネットワークが中心になっているが、その核になるものがないとネットワークがうまく機能しないと考える。そのすべてを図書館が担うということではないが、その部分の基礎とか土台には図書館があるべきだ。様々な事や物をつなぐという役割の中心に図書館がある必要がある。
　他方の教育関連の話で小中一貫校の９年間ということであれば、学校図書館を中心とした教育を体系的に積み上げていくことも考えておく必要がある。そういう事が可能となれば、論点整理の中で意見として出ていた高校生や大学生などが、学習と生活の関連性をうまく意識できないという問題も、小さい時から図書館に親しむことである程度解消できるのではないか。

つまり学校図書館を活用できるスキルが身につけば、成人以降も一層活用するようになるし、学校図書館の利用教育を受けることで問題解決能力や生きる力も育っていくと思う。たとえば、図書館の中に学校図書館を作った自治体があるように、思い切って公共図書館が学校図書館でもあるような施設ができればいいなとも思う。

また、そこが災害時避難場所になった場合、避難場所に本がある訳で「居場所」であり、そういう施設の土台部分に図書館があって欲しいと思う。

●委員

この論点整理や前回議事録では、子どもと高齢者の問題が差し迫った問題として取り上げられているが、その世代だけではなく２０代後半から５０代くらいまでの単身者が、地域の中でどう図書館を活用することができるのか、その働きかけの必要性を感じた。あらゆる世代を通して図書館が生活のベースとしてあるような大きな図書館を目指すべきだ。地域の課題については、表面だけでなくその背景にあるより大きな問題も見据えていただきたいと思う。

●委員

南部地域の子どもの現状ということで、家庭環境に様々な背景を持った子どもたちにとって、すべてではないにしろ自尊感情を持つことの難しさや卒園した子どもたちの学年が進むにつれ学習意欲の問題などで登校拒否になったりする傾向も見られることなどを前回の協議会で発言したが、間口が広く敷居が低い図書館が、子どもたちが気楽に集まれる「居場所」として状況を改善する役割を担う可能性もある。また、図書館でもお話し会などで子どもたちに働きかけているが、子育てに頑張っているそんな子どもたちの親世代も元気になり自己肯定感をもって生きていけることを応援するような講座を企画したりする、（仮称）南部コラボセンターはそんな施設であって欲しい。

●委員

子どもにとってほっとできる敷居の低い図書館へということは、当然保護者にもほっとできる施設であるということが大事で、子どもを安心して行かせられる図書館、学校が終わってからの放課後の使い方にも大きく関わることなので保護者世代にも同時にアピールしていくべきだ。

また、（仮称）南部コラボセンターが災害時の拠点になる話であるが、もしそういう機能があれば図書館に対する安心感につながっていけるだろう。

●委員

（仮称）南部コラボセンターと千里コラボの比較をした時、数字を見ているだけでは見えないものがある。南部地域に勤務する教員や地域住民から意見を聞くことが大事だ。

それと災害時の拠点として、建物や書架の耐震の話も重要だが、災害時の対応を誰がするのかということや救援物資の問題などで市の防災計画に位置づけておくことの必要性なども考慮すべきだ。さらに図書館本来の話だと災害時に避難所への本の貸出ができるなど色々な事を考えておく必要がある。

●委員長

詳しいデータは覚えていないが、５０～６０代への内閣府のアンケート調査で「リタイアした後に必要な施設」に対し、病院や公共交通機関の後に図書館が入っている。図書館の必要性がよく伺える回答だが、図書館が子どもたちにとって安心して送り出せる施設と考えられているのか心もとない部分もあるし、高齢者も図書館利用の経験がもとになって図書館利用につながっているかというと決してそうではない。行き場所がなく時間をやり過ごすためだけの場所として消極的な理由があるのではないか。これからの図書館の課題として、子どもや高齢者が図書館をどういきいきと利用してもらえるのか、そのためのサービスとはどんなものか、それを押さえる必要がある。

●委員

図書館で対象として取り上げられるのは、子どもと保護者と高齢者である。民間でも同様だが忘れられがちなのが単身の働き世代。たとえば、携帯の割引など様々なサービスから漏れやすい。納税しているにも関わらず十分なサービスを受けられていない世代は、時間的にも図書館への来館機会が少ない。当然図書館側からも目につきにくく、サービス対象として念頭に上らないことが多い。また、現実は働いている単身者も非正規雇用等、様々な問題を持っている。焦点が当たりにくい現役世代にも、図書館という存在が生活にとって潤いや豊かさをもたらすものだということは、小さい頃からの図書館の利用体験があって初めて理解されることだ。しかし、現実的には図書館はリタイアしてから利用する施設というのがこの世代の認識だと思う。今働いている現役世代が、そのまま単身で居続けたら、孤独な高齢者になる可能性もある。こういう点を忘れないで欲しい。

●委員長

現役世代にとって、図書館はまだまだ活用されていない施設で、日常生活の中で図書館が位置づけられていない。現役だった時にいきいきとした図書館利

用体験がなく、高齢者になって突然サービスを受けるようになっても、本来の高齢者サービスから少しずれているということですね。
●委員
　世代でターゲットを決めて図書館サービスを考える時には全世代を考慮に入れる。イベントなどする時でも来たいと考えている利用者はすべからくサービス対象である。こう考えるべきです。

●委員長
　その中に様々な世代に対する配慮をきちんとしておくことが、本来の高齢者サービスといえるのではないかということですね。

●委員
　最近、図書館を利用することによる利用者のアウトカム・成果とは何かという調査が始まっているが、まだまだ読書する場所というイメージが強い。子どもの頃から本に親しんでいるだろう司書課程の学生ですら充実した図書館体験を有しているとは言いがたい。たとえば、学生たちにレファレンスサービスなどの図書館サービスについてもうまく伝わっていないところからも伺われるところである。色々なところで出されている図書館を使うことのメリットを、子どもたちの親世代や働く世代・高齢者にどう伝えていけるかだと思う。たとえば、アメリカでは、カーネギーのように図書館を利用することによる成功体験などにもあるように図書館利用における成果を実感している利用者が多い。

●委員
　働き世代は忙しいので待っていても来ない。たとえば商工会と連携して各事業所にお願いして図書館に行く日をつくってもらうとか、図書館に行く時間は何らかのカウントをしてくれるとか、仕組みから変えるようなことを提案していくことが必要ではないか。たとえばボランティア活動の話になるが、アメリカなんかでは、職を持っている人が昼休みにボランティアで参加をした時、休憩とせず働いていることにカウントできたり、災害地に行っている時、給料は行政が補填するとかがある。
　それと、庄内地域の働き世代の図書館利用登録者数を見ていると、千里より圧倒的に少ない。行く機会自体が少ないかもしれないが、活用する気になれる図書館の仕組みを考えていくべき。

●委員長
　働き世代の利用状況が低調ということであれば、きちんとその世代の人にど

うアピールしていくのかという工夫もいる。機能以前の問題として図書館にはどんな魅力があり、それをどう働き世代に伝えるのかが大切なことだと思う。

●委員

行って得をした気分になる「お得感」があるそういう施設であれば、日常の忙しさがあったとしても再度行く気になる。こういう単純な気持ちからの発想も大事だと思う。

●委員

たとえば、施設面では親子世代には丸みのある机等で優しく迎える雰囲気に図書館はなっているが、働き世代に行く気になってもらうには、たとえば図書館にカフェが図書館にありお茶を楽しみながら本に触れることができる、そんな施設があれば魅力的だと思う。

●委員

図書館とは何かと考えた場合、高齢になるにつれ目も悪くなり活字を読むのがしんどくなり、内容も頭に入りにくくなってくる。そんな時に読みたいのは、価格が高く、個人では購入しにくい図録ですが、図書館にはそんな高価な図録や美術書もたくさんあり非常にありがたい。それに図録などは非常に重いので、図書館の机でゆっくり読むことが出来る。適切な表現かどうかは置くとして、これが「お得感」があるということだ。図書館は本を読む場所のみならず、図録や美術書など重い本を見ることの可能な場所でもある。「見る」という視点を加えればより「お得感」が出てくるだろう。仕事で疲れて帰ってきた働き世代が図書館に行って読みたいのは、よほどの読書好きでない限り活字の詰まった本よりビジュアルに訴える図録などではないかと個人的には思う。

●委員

どの世代も疎かにしないのは当然ですが、働き世代になっていく子どもたちを、図書館の使える子どもに育てることも大事だ。学校図書館の利用教育の充実で、国語の授業の一環や趣味や心を豊かにする読書だけでなく、体育だと筋肉をどう鍛えたら記録を伸ばすことが出来るかなど、全教科にわたり学校図書館を使って学習することが可能となる。学校図書館でこれらの本を使える子どもになると、大人になっても図書館が問題解決の一助になるという発想が持てる。情報リテラシーの面で言えば、情報に振り回されるのでなく自分にとって必要な情報は何か、それを自分で考えて選び取っていく力は図書館で培われていくのだと思う。

●委員長

図書館の児童サービスの一つの基本として、大人になっても図書館を利用できる能力を養成していくことにある。調べ発見することの楽しさが身についていれば、将来図書館を積極的に利用する人に育つ。知識は十分でなくとも調べる能力があれば、図書館があればどこでも生活できる、こんな考え方もあってもいいだろう。ただ、そういった児童サービスを受けてきた子どもたちが成人して図書館を利用できているかというと、現状そうではない部分がある。

また、図書館は公共サービスで金銭的コストは不要だが、実はサービスというものは、サービスを受ける人が時間コストというものを払っている。その意味で図書館サービスも時間コストを利用者が払っている。働き世代にとって図書館で払う自身の時間に見合う「お得感」がないと図書館を利用しない。働き世代が持つ少ない自由な時間、その貴重な時間に見合うサービスを図書館が提供していけるか、このことが大きな課題だ。

基本のところを皆さんから意見をいただいたが、それは個々のターゲットを課題として考えるだけではなく、図書館全体をトータルな視野で機能をつくりあげていくことが肝要だということだと思う。個々のターゲットに向けて特化した機能があるのではなく、いろんなサービスがあらゆる人、あらゆる世代にきちんと提供していく中で、様々な人が利用しやすい仕組みでないと、活きたものにならない。

事務局からこれまでのさまざまな経緯や補足など説明してください。

●事務局

それでは、就労支援・学習支援・子育て支援・学校連携等の四つの機能について、配布の「豊中市の図書館活動 平成２７年版Ⅰ・Ⅱ」をご覧いただきながら、今図書館として取り組んでいることと（仮称）南部コラボセンター構想の策定、その後の情報交換会やラウンドテーブルなどでの意見などもふまえ、どのような課題があり、どんなサービスが考えられるかということなどを情報提供させていただく。

まず、就労支援については、「図書館活動Ⅰ」の６ページにビジネスゼミナールのことが、１４ページにテーマごとの取組みが記載され、ビジネス・就労支援についての図書館の取組みが掲載されている。平成２７年度からは産業振興課と企画段階から連携し、各分野の専門家を招いて、例えば「起業」などについて講演会をおこなっており、その際に資料紹介なども司書が行っている。

（仮称）南部コラボセンターに関わる情報交換会等でも機能についての検討が行われ、就職支援や職業訓練拠点さらには若年層を対象としたキャリア教育について様々な立場の方からご意見をいただく機会をもった。（仮称）南部コ

ラボセンター内およびサテライトとなる施設と連携しながら、図書館としてはセミナーや訓練などの際、資料による情報提供を行うとともに、（仮称）南部コラボセンターにおいては、情報検索コーナーでのインターネット環境の利用支援といったことも必要になると考えられる。

庄内図書館では３階の協働事業スペースをしょうないＲＥＫの実施日、火曜日以外は自習室として開放しているが、普段あまり来館されない３０代～５０代の方が資格取得の勉強に利用されている光景も見られ、（仮称）南部コラボセンターでもこういう機能が必要だと考えている。

次に子どもの学習支援だが、南部の高川図書館では「ぶらりあん」、庄内図書館の児童室や協働事業スペースの開放を中心に、図書館資料の利用のみと限っている席についても自習を認め、子どもたちの学習の場の確保を公民館など他の施設とともに行っている。また高川図書館では 26 年度より庄内公民館と連携して学習サポートを夏休みに行い、大学生ボランティアによって近隣の小学生の夏休みの宿題の支援を行っている。庄内図書館については、しょうないＲＥＫの事業の一環として同様の事業、「夏休み宿題おたすけプログラム」を実施している。これらについて、まとまった記述は図書館活動にはないが、Ⅱの統計資料編に高川図書館は２５ｐに、庄内図書館は協働事業の２６ｐに項目のみの掲載がある。

（仮称）南部コラボセンターについても南部地域に生活に課題をかかえる子どもたちが多いことから、学習スペースの確保、さらにはそれを支援する仕組みが必要だと考えている。（仮称）南部コラボセンターに関する検討の中でも自習室開放事業については図書館と別に論議されていることから、図書館外に学習スペースが設けられる可能性も大きいが、その際調べ学習などに関連する資料、あるいは児童向けの図書についてもそういった学習スペースとの隣接が望ましいと考えられる。

３つ目の子育て支援は、Ｉの報告１７ｐの「ブックスタート事業 えほんはじめまして」、１９ｐの放課後子どもクラブや子ども文庫、おはなしボランティアの項目にもあるとおり、現状でも市民や関連部局との連携を深めながら事業を展開している。成人も含めて図書館利用が低調な南部地域において、特に「ブックスタート」については、保護者と赤ちゃんに出会える貴重な機会として、その重要性を認識し継続して実施している。

高川図書館については南部地域連携センターや公民館とともに、ベビーヨガなどを実施、保護者が図書館に来館するきっかけづくりとしている。また近隣の子育て支援センターなどとの連携もすすめていることから、現段階では保健センターや子育て支援センターが（仮称）南部コラボセンターに同居するかどうかは不確定だが、先ほどの他市の事例にもあるように、乳幼児関連の資料と

子育て支援機能との隣接、あるいは連携等について検討する必要があると考えられる。

最後に４つめの学校連携は、Ｉの報告１８ｐから団体へのサービスの一つとして、学校図書館・支援ライブラリーについて、そして３１ｐからとよなかブックプラネット事業について掲載されている。各小中学校に学校司書が配置され、公共と学校の間で資料面はもちろん、研修の場をもつなど、連携を深めていること等についての内容となっている。また学校図書館支援ライブラリーによって読書や調べ学習の支援、さらには教員向け資料についても収集、貸出を行っている。今回魅力ある学校づくりということで、１１月に説明会があるが、（仮称）南部コラボセンターは、初めて小中一貫校と公共図書館を含む複合施設が隣接する形となる。公共図書館と学校図書館についてはその設置目的が違うが、たとえば小中学校の児童・生徒が学校図書館とともに公共図書館を使いやすい仕組み、施設がどのようなものかを南部地域の状況に鑑みながら今後検討していく必要があると考えている。たとえば、現在は施設面での課題で庄内図書館では出来ていないが、他の図書館で実施している子どもたちの成果物の展示や、おすすめの本の帯やポップを展示するスペースなどは図書館あるいは（仮称）南部コラボセンター内にも必要ではと考えている。先ほどの学習支援にも関わるが、学校図書館と公共図書館との資料の連携、放課後や休日に子どもたちの居場所となるような場、そして（仮称）南部コラボセンターで時間をすごす中で自然と資料を手に取り、インターネット環境にふれる、そのようなスペースづくりについてもご助言いただけたらと考えている。

また、この４点の機能それぞれが一つの施設で他の部局と連携しながら十分発揮されるためには、限られたスペースの有効活用が必要となる。図書館部分についても、ワンフロアーなのか複数フロアーにするのかによるメリットとデメリットを検討する必要がある。たとえば、一つのフロアーだと成人室と子ども室などの間も行き来もしやすいが子どもの声が気になり音のゾーニングをどうするのかという問題も出てくる。複数のフロアーにすれば、図書館資料が分断されるがそれぞれの機能ごとに資料提供が容易になるメリットも考えられる。

こういった事も考慮し、お話し会や保育のためだけの、あるいは学習支援のためだけの、そういったスペースを作るのではなく、汎用性のあるスペースを設置することも必要だと考える。（仮称）南部コラボセンターに関して、市民の方からも気軽に入れるような、外から何をしているのかわかるようなスペース作り、たとえばガラス張りにしてほしい、といったご意見もいただいている。まとまった資料がない中で口頭での長い説明となったが、ご検討をお願いする。

●委員長
　図書館がネットワークの核になってほしいと先ほど発言があったが、（仮称）南部コラボセンターには様々な施設が入ることになるが、その中で図書館は誰でも来ることができ、目的がなくてもまた一人ひとりの自由意志で来られる施設なので、間口の広い図書館を入り口にして（仮称）南部コラボセンター全体が持っている機能をどう育てていくかということになる。
●委員
　中で行われていることが外から確認できる、それは施設への安心感という点から非常に大事だ。（仮称）南部コラボセンターは、いろいろな人が来る施設として自由に使えるスペースの重要性も感じた。図書館スペースは、物理的な壁もないことから一つのフロアーのほうが人の行き来が自由になるのでいいと感じた。

●委員
　支援センターのある園ですが、外から見えるプレイルームが開設された際、地域の人たちに保育所の中に入ることに戸惑いや不安があった。それはプレイルーム開設の周知の機会も少なく地域との関わりも少なかったことにも要因があった。しかし、ＨＰ等に載せてアピールしていく中で来園される人が多くなり、それによるロコミで広がっていくようになる。やはり外から中が見えることがよかったのではないかと考えている。（仮称）南部コラボセンターに入る可能性のある子育て支援センターも、まずその存在をアピールして地域のお母さんたちに周知していく努力が必要だと感じた。

●委員
　ワンフロアーなのか複数のフロアーにするかは、単純に平米数をどれだけ確保できるかに関わってくる、所与の条件に規定されることだと思う。
　報告Ⅱの１４Ｐの８番にある対面朗読が庄内と高川はゼロになっているが、（仮称）南部コラボセンターではこういう障害者サービスについてどう位置付けられるのか。対面朗読可能な施設になるのか。
●事務局
　これは対面朗読が結果的になかったという数字。基本的にどの図書館でも対面朗読は可能で、全ての方にＰＲしている。結果として対面朗読の要求はなかったということです。設備面でいうと岡町のように専用の対面朗読室がある図書館と、専用の部屋は無く集会室等を代用している図書館がある。（仮称）南部コラボセンターでも対面朗読は当然やっていく。
　（仮称）南部コラボセンター構想の中でも障害者に関わる部局も入っている

のでその視点を含めバリアフリー化のことも今後論議されていくことになる。
　また、フロアー活用についてだが、ワンフロアーはイメージ的には千里コラボにある千里図書館である。千里コラボの４階フロアにあり、その他の階には、公民館・老人センター・出張所・保健センターなどが併設されている。利点としては、図書館機能を集約して行き来がしやすくなっていることのほか開館時間も同じで管理しやすいということだ。他方複数のフロアーになると、子育て支援などの施設内の他の機能との連携や他の施設の機能に合わせた資料提供ができやすくなる。これらのことも考え合わせ議論を進めていくことになる。

●委員長
　フロアの件は、それぞれのサービスのポイントの重点を図書館の中に置くのかそれぞれ連携先に置くのかによって変わってくる。サービスの拡充・充実にとってどんな形が良いか、どちらがより効果的なのかそこから考えるべきだ。
　障害者サービスは、今年４月より障害者差別解消法が施行されたが、障害者のニーズも個々さまざまで、その中で対面朗読の利点のアピールはまだまだ足りないと感じる。一人ひとりの障害者に対するサービスも、ていねいにアピールしていかないと広がらない。実際に障害者と関わっている人の話を聞きながら、図書館が個々の障害者に出来る事の内容を伝えていくことは大事だ。図書館だけではできることも限られているので、関連機関が連携しながらつないでいくことが重要だ。

●委員
　障害者に限らず利用者一人ひとりにどう関わっていけるかによると思う。豊中市は人口密度が高く、そんな中で顔の見えるサービスをどこまでできるのか難しい点も多いが、顔の見える関係の中に図書館があればいいなと思った。
　庄内図書館は多文化サービスについて積み重ねてきたものがあるので、それを大事にしながら特色を出していってほしい。

●委員
　貸出は低調ながら来館者数は多いという庄内図書館の話は、各世代利用者の潜在的ニーズを発掘しきれていないからではないか。
　学習支援で言えば、今の子どもたちは学校図書館の充実もあって図書館の使い方や調べ学習など進んでいるが、親世代にとって図書館は本を読むところ、何かを調べるための利用という発想がない。公共図書館は、子どもたちと親の世代の図書館利用のギャップを埋めていく努力をする必要がある。

●委員
　ばらばらだが３点ある。１番目は大人の利用促進についてですが、たとえば金沢２１世紀美術館のように、子どもが利用すると大人の割引券をプレゼントして、次回は親と一緒に来やすくしている。こんな事例もある。
　２番目は学習支援について図書館の関りはよく理解できるが、就労支援についての図書館の関わりがピンとこない。梅田のナレッジキャピタルにみられるように、多くの人が会費を払い利用して何をしているのかよく解らないが有効活用しているらしい。一方、図書館に働き世代があまり来ていない現状もある。
　３番目は、働き世代が高齢者なる前に図書館とはこういうことで利用できますよと促進するようなセミナーがあってもいいのかなと思った。

●委員
　図書館が就労支援でやっていることについて、もう少し具体的に説明してください。

●事務局
　南部ではあまり就労支援はできていないが、（仮称）南部コラボセンターの構想会議において就労支援は議題として上がっている。（仮称）南部コラボセンター構想を進めていく上で、千里とは地域特性の違いから求められるものも当然違ってくる。図書館が直に就労支援に関わることはないが、図書館がするべきこととしてビジネス支援に関する蔵書も千里とは違ったラインアップになってくる。
　就労支援のセンターとともに、大切なセンター機能としてキャリア教育がある。（仮称）南部コラボセンターの情報交換会では近隣の教員の方も参加しているが、子どもたちのロールモデルが近くに居ないという意見が出た。また資格を取る勉強などの重要性、学校と企業の連携の強化、子どもたちの将来の職業選択の核となるキャリア教育を学校連携の中で進めていく拠点としての機能が必要という意見もある。中学生の職業体験も現場の教員の方々の負担も大きく、（仮称）南部コラボセンターでは企業と学校をつなぐコーディネーターのような存在が必要ではないかという意見も出た。図書館の出来る事は資料活用を支援することだが、今年度南部ではビジネスセミナーが予定されている。南部は小さい企業や飲食店が沢山あり、そういった方々に対するテーマとなっている。
　補足だが、千里図書館のビジネス支援では、レファレンスで資料につなぐだ

けでなく、豊中市では就労に関わることがいろいろと企画され、沢山の部局が関わっている。そこでは無料で資格取得にプラスになることなど様々な情報があるが、図書館がそういった情報を一元的に集めている。また、ハローワークの情報も毎週新しいものを一部図書館でストックしている。まず身近な図書館で就労に関する情報などを見てもらい、そこからつないでいく役割を図書館は果せているのではと考えている。

●委員長

話に出た会員制のビジネスライブラリーは、ロケーションのせいもあって受けている人が多い。そういう場所に行っているというステータスや満足感もあるのでしょう。しかし、公共図書館で調べ物をする積極的な意味づけを利用者自身が発見できていない。となると、図書館へ行く動機も希薄になる。やはり、図書館に行く意味を見いだせられる仕掛けを積極的に考えていくことが重要だ。サービスの成否はこのあたりに掛かっている。

●委員

ビジネス支援を考えると、利用する人はどの様な人なのかを考えると自ずと方向性が見えてくると思う。仕事自体を求めるあるいはランクアップを望む人が来るなどさまざまだ。仕事を求めるにも無職の方が望むこと、転職したい人が望むこと、仕事に対する思いは違うはず。ビジネス支援も仕事を求める人の思いに寄り添ったきめ細かいものにする必要がある。

●委員長

（仮称）南部コラボセンターを作る時に、地域のニーズを把握しないと、地に足の着いたサービスは展開出来ない。地域の人にどんな期待があるのか持ってもらえるか、与えられるのか、これらを踏まえながらバラバラでなくトータルでのサービスを考えていくべきだ。

こういう視点を持った上で、それぞれのサービスがいきたものとして利用者に届く仕掛けは大事になってくる。

では、最後の案件の「その他」をお願いします。

●事務局

事務局からの報告になります。

９月１日に山田洋次監督ライブラリーが岡町図書館２階で開設し、１０月１５日には名誉市民称号授与式の後、岡町図書館に来館され展示内容をご覧いただいた。

次に、『豊中市の図書館活動』の平成 27 年度版を作成した。今回は『図書館活動』の１として〝報告”２が〝統計・資料編“と大きく表記した。

目次を見ると良くわかるが、トピックス、地域・市民との協働、子ども読書活動推進計画など、特に昨年度図書館で新たに取り組んだことがらや新たな展開があったものを中心に紹介している。

事業報告では、それぞれのサービスについて数値や分析も交えた振り返りとともに、図書館の魅力発信ということでＰ２４メディアのなかの豊中市立図書館といった情報発信やＰ２６「職員による出前講座・講師派遣」等が一覧でわかるようにしている。

これらの取組みの成果もあってか、とよなかブックプラネット事業やブックスタート事業「えほんはじめまして」、しょうないＲＥＫなどについて視察が多くあった。また、図書館のめざす姿の実現に向けての進行管理の報告として「グランドデザインの進捗状況」進行管理報告書を掲載している。これらの情報は図書館 WEB ページでも閲覧可能である。

次に、千里図書館では 10 月より月曜開館を開始した。時間は 10 時から 17 時まで。これで千里図書館は、年末年始や月の最後の金曜日、資料点検の日を除く日が開館日となる。始まったばかりで利用の傾向はつかめていないが、平日に比べて 5〜6 割の利用である。今後も周知に努めていきたい。

図書館の広域利用については、現状では、豊能地区の 3 市 2 町（豊中市・箕面市・池田市・豊能町・能勢町）間、また、それとは別に豊中市・吹田市に隣接している各４館でそれぞれの住民が借出し利用できる形で実施している。今後は吹田市・茨木市・高槻市・摂津市・島本町を加えた 7 市 3 町の北摂地区全域での広域利用実現に向けて、各自治体担当者間で検討を進めており、平成２９年度中の開始を予定している。

9 月 15 日より、国立国会図書館の「図書館向けデジタル化資料送信サービス」を千里図書館で導入した。国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、インターネットで公開されておらず、絶版等の理由で入手困難な資料約 142 万点が、図書館の専用端末を通じて利用可能となった。

最後に「豊中音楽月間」についての報告だが、豊中市では 10 月から 12 月半ばにかけて町中で音楽に楽しむ様々な事業を展開し、図書館の関連事業として音楽に関する資料やＣＤ・レコードの展示、野畑図書館のジャズコンサートの事業が掲載されている。今年度で 3 回目になる庄内図書館が事務局として関わっている「しょうないＲＥＫ」協力による「世界の庄内音楽ワークショップ」については日程とともに内容が掲載されている。

豊中市の音楽に関する取り組みが文化庁長官賞を受賞したことは前回もお伝えしたが、表彰にあわせて文化庁長官が 10 月 10 日に庄内図書館にも来館され

取り組みについて説明する機会があったことも報告させていただく

●委員長
今の事務局の報告で何かあるか。
以上で第二回豊中市立図書館協議会を終了する。
次回は来年の２月ぐらいの予定。